

〔北総文化研究センターから〕

北総文化研究センター主催「研究会」の経過報告（その7）

はじめに

前号では、第35回までの研究会の要旨を報告したので、今号ではそれにつづく、第36回以降の研究会について、それぞれの要旨を報告する。なお、報告者の肩書きは報告当時のものである。

第36回 研究会

1. 日時 2007年4月20日(金) 教授会終了後
2. 場所 2号館2階会議室
3. テーマおよび報告者

テーマ「カンボジア仏教寺院における俗人修行」

報告者 高橋美和 准教授

4. 報告要旨

カンボジアは上座仏教を国教とする国家で、人口の大部分が仏教徒と言われている。仏教寺院は僧侶が止住する場所、学問をする場所、であると同時に、一般在家にとっては祭りや儀式の場、つまり宗教実践の場として

の機能がある。一般在家社会では高齢期に在家戒を遵守する持戒生活に入るという慣習があり、その一部の人々は家族生活をやめて寺院に暮らしの場を移し、寺院生活を送る。寺院はこうした人々の修行の場ともなっている。これら俗人修行者の圧倒的多数が女性であり、ドーンチーと呼ばれている。多くのドーンチーは寡婦であり、あるいは経済的に頼れる近親者を欠いている。また1970年代から20余年続いた内戦時代に肉親喪失の経験を持つ人々が多い。

本研究会では、ドーンチーの寺院生活の概略と、その背景にある信仰や人生観について、現地調査で得られたデータにもとづいて報告した。

ドーンチーの多くは家族生活を営めない背景要因を何かしら抱えているものの、〈寺院入り〉はあくまで自発的であり、修行生活への志向がもともと強かった人々でもある。寺院での彼女らは一般に精神的に満ち足りており、一部を除いては、寺院を終の住処と認識している。

ドーンチーたちは寺院境内に個々の住まいを持ち、自律的な暮らしを営みつつ、ゆるやかな連帯を保ちながら共に修行をし、寺院内

の仕事を手分けして行い、また困った時には助け合える態勢が作られている。寺院構成メンバーとして、一般在家の儀礼（葬式など）に招聘されることも多く、そこでは僧侶に準じる存在として布施の対象にもなる。

高齢者のための公的な支援がほぼ欠如しているカンボジアにおいて、高齢者の寺院生活とは、宗教実践の形を取りつつも、高齢者の広い意味での福祉を担う文化社会的装置であることを指摘して、結論とした。

第37回 研究会

1. 日時 2007年5月18日(金) 教授会終了後

2. 場所 2号館2階会議室

3. テーマおよび報告者

テーマ「ワーク・ライフ・バランス論の課題」

報告者 鈴木奈穂美 講師

4. 報告要旨

近年、経済界・労働界をはじめ各方面で積極的に議論されている、ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）に関する報告が行われた。

まず、都市化・産業化などの進展に伴い、職業生活が巨大化したことで生活全体のバランスがくずれ、生活全体に支障がでてきたため、アンバランスな生活を見直すためワーク・ライフ・バランス論が登場してきたという説明があった。我々の生活が、職業生活・家庭生活・地域生活・個人生活を包括したものであるとすると、現在のワーク・ライフ・バランス論の多くは、職業生活と家庭生活のバランスに関する議論が中心となっているという

事実の指摘があった。市民が積極的に地域活動へ参加できる社会づくりが求められていることをふまえ、これからは職業生活と家庭生活だけでなく、地域生活も含めた新たなワーク・ライフ・バランス論が必要であると言及していた。

5. 主要な質疑討議など

地域活動をしている割合の高い属性に関する質問や、実生活での経験を踏まえたワーク・ライフ・バランスの実践について意見が出され、闊達な議論がおこなわれた。

第38回 研究会

1. 日時 2007年7月20日(金) 教授会終了後

2. 場所 2号館2階会議室

3. テーマおよび報告者

テーマ「刺激のない世界」

報告者 鈴木由起生 教授

4. 報告要旨

本報告は sensory deprivation（感覚遮断または刺激削減）の研究に関するものである。報告者は、東北大学文学部心理学研究室が1961～1971年まで13回行った共同研究のうち、大学院在籍中（1962～1966年）、6回の研究に関わった。

（1）研究の目的

感覚器官に与えられる刺激が削減された場合、人間にどのような変化が起こるかを明らかにすることである。

（2）研究の背景・契機

背景・契機としては次の六つが挙げられる。

①刺激の少ない環境における人間の行動に対する関心（朝鮮戦争で中共軍の捕虜に

なった者の体験→洗脳の問題)

- ②産業における関心（例えば原発や化学プラントにおける計器の看視作業者の問題）
- ③発達に及ぼす初期経験の効果（生後、暗室など乏しい刺激環境で育った動物の発達障害）
- ④神経生理学の進歩による覚醒水準と外部刺激との関係
- ⑤動機づけとの関係（外部からの要請への対応ではなく、好奇心や探求心等の内発的動機の問題）
- ⑥自我心理学の展開（現実と交渉し適応をはかる自我の自律性の強調）

（3）刺激制限の手続き

刺激制限の手続きには次の三つがある

- ①感覚的刺激入力 of 絶対的水準をできるだけ低減しようとするもの
- ②刺激のパターン化を制限しようとするもの
- ③刺激の変化を制限しようとするもの

（4）東北大学の研究について

刺激削減の手続きは刺激のパターン化の制限と変化の制限であった。変化の検証は前後テストと統制（対照）群法を組み合わせで行った。結果のいくつかを示すと、次の通りである。

- ①刺激削減環境に対する被験者の耐性は、途中でリタイアする者が少なく、カナダで行われた研究に比べると高い。
- ②刺激削減環境の影響の持続時間は、終了後1～2時間で、比較的短い。
- ③刺激削減の阻害的影響としては、知覚の体制化や形態化機能の低下が、ミュラー・リヤー錯視の錯視量の減少やベン

ダーゲシュタルトテストの模写力の低下という形で認められた。

- ④刺激削減の促進的效果としては、感覚の鋭敏化が、触二点弁別閾の低下やランドルトリングの認知閾の低下という形で認められた。
- ⑤刺激削減の阻害的效果と促進的效果の複合効果としては、感覚の鋭敏化と被暗性の高まりが、重量漸増テストにおける間接暗示にはかからず、直接暗示にはかかるという形で認められた。

（5）刺激削減環境と日常生活との関係

- ①入眠時、覚醒時、入浴時間は、刺激削減環境と類似している。
- ②刺激削減環境においては、外界刺激への対応よりも、自己の内部刺激への対応が活発になる。
- ③刺激削減環境に対する認知と行動には個人差があり、刺激削減環境を好ましいとみるか、好ましくないとみるかによって対応は変わってくる。
- ④橘曙覧の次の句が示すように、刺激の最適水準には、個人差もあれば個人内変動もある。

楽しみは草のいほりのむしろ敷き　ひとり心をしずめをる時

楽しみは乏しきままに人集め　酒のめものを食へるといふ時

なお、本研究は、北村晴朗・大久保幸郎編著『刺激のない世界』誠信書房1986にまとめられている。

第39・40回 研究会

1. 日時 2007年9月19日(金)および、11月
16日(金) 教授会終了後

2. 場所 2号館2階会議室

3. テーマおよび報告者

テーマ「ジェイン・オースティンと時代」

報告者 伏見親子 准教授

4. 報告要旨

ジェイン・オースティン(1775-1817)は、約200年前の英国の作家で、6編の完成作品を残し、41歳で静かな未婚の生涯を閉じた。作品の舞台は、彼女の生きた18～19世紀初頭の英国南西部の片田舎の紳士階級の日常生活、と非常に狭い。にも拘わらず、時代と国境を超えて、現代に至るまで根強い人気を誇っている。そこで本発表では、現代のオースティン作品の受容状況と、作家の時代の作品の受容状況の考察を中心に、時代を超えて読まれ続ける要因を探った。

現代では、学会としては、英国にジェイン・オースティン協会があり、協会に届けてはいるが独自に活動をしている支部が英国各地にある。海外には北アメリカ、オーストラリア、アルゼンチンに代表的な協会があり、スカンジナビア、オランダ、マレーシア、中央アフリカにまであると言う。そしてつい先頃日本でも発足した。各国語翻訳はもちろんのこと、関連商品は、パズル、カード、時計、バッグ、登場人物のコスチュームまで幅広い。映像化された作品は、代表作の『自負(高慢)と偏見』だけでも10本余り、最近ヒットした『ブリジット・ジョーンズの日記』も一種の翻案

作品である。

オースティンの時代の英国は、産業革命によって新興市民階級の台頭が起こり、裕福な商人達は既存の紳士階級に入り込むようになった。東インド会社などを通じて植民地からの利益が国庫を潤した一方、隣国フランスで革命が起き、国王・貴族・僧侶を中心とした旧体制が崩壊し、対戦国であった英国の支配者層にも現体制崩壊への危機感が芽生えていた。オースティンには、東インド会社に関係して財産を築き、フランスの貴族と結婚したものの、その夫と財産をギロチンで失った従姉がいた。また、兄弟達は海軍軍人となって、フランスとの戦いを経て出世していた。近隣の家族には商人から身を興し、紳士となって家を構えたものもいくつかあった。父親は紳士階級に連なる牧師である。

またその時代は、識字率が上がり、貸し本屋の普及もあって、生活に余裕が出てきた中産・商人の階級、そしてその家族の女性にまで読者層が広がるようになり、そういう「読む女性」に向け、女流作家も出現していた。オースティンの曾祖母、母の従姉、母も「書く女性」の先達であり、兄弟達も戯曲を書き、雑誌を発行していた。

そういう素地の中で、オースティンは、体制側の階級の人間であり、その中の一員として小説を書いたので、革命を危惧することによって厳しくなっていた検閲とは無縁であり、同階級の「読む女性」やその家族に受け入れられ、読まれていった。時代を映す政治体制や社会を主題にせず、いわば普遍的な「人間とその相互反応」のみに注目し、巧みな人物の配置と構成のもとにそれを対話の中に凝縮して見せた。シェイクスピアや近松にもど

こか通ずるこの手法こそが、その時代の中で受け入れられ、時代を経ても、時には舞台設定を変えて翻案され、読まれ続ける最も大きな要因である。

第41回 研究会

1. 日時 2007年12月20日(金) 教授会終了後
2. 場所 2号館2階会議室
3. テーマおよび報告者

テーマ「情報通信技術（ICT）分野での
日本の国際競争力」

報告者 中村典裕 教授

4. 報告要旨

日本におけるコンピュータの世帯普及率は70%を超え、世界の中でもトップクラスである。また高速インターネットの普及率は、世界で最高水準である。しかし、情報通信分野（ICT）での国際競争力は近年低下傾向にあり、2007年には、前年の16位から24位に後退した（IMD 調査結果）。これは、特に行政分野での情報通信利用が進んでおらず、いまだに ICT 利用が専門家に留まっている現状を反映していると考えられる。

本研究会ではそのような現状を紹介するとともに、鉄道のチケット予約システムや落し物データベースなどについての各国の現状を比較した。

その後、日本が ICT 分野でも世界のリーダーシップを取るためには何が必要かについて論じた。特に、小学校段階からの早期教育と、高齢者対象のデジタルデバイド克服プログラムが有効であると考えられる。